

# 沖

11  
2021

俳句雑誌[沖]



# 画廊

能村 研三

表紙絵

夏惜しむ暮色遠へる遠景色

ジエンダーのすすむ人の世日雷

夕風や船を焚きたる火の勢ひ

庭茗荷かつては父が摘みくれし

今朝秋のダム湖に生えし死木かな

未見なる幼児の忌や益母草

豊の秋まだ一鎌も入れざりし

朴一葉落つそれからの月日かな

画廊よりついて来たりし秋思かな

括りゐて弾力のある矢切葱

「能村登四郎年譜」によれば、「馬酔木」に入会したのは、「昭和十四年で、ある時書店で表紙絵の美しい『馬酔木』を発見。今までの自分のもっていた俳句のイメージと全く異なっている新鮮さに心を動かされて投句してみる気になった」とある。「馬酔木」の表紙絵は水原秋櫻子先生が自ら選んだもので、号が変わるごとに先生がお持ちの絵を表紙絵とされていたそう。その「馬酔木」の表紙絵となった一枚の絵を、秋櫻子から登四郎に何かのご褒美でいただいた。今も我が家の宝物として大事に保管している。

先日現「馬酔木」主宰の徳田千鶴子さんにお会いした時、その絵に鹿兒島の桜島が描かれていることをお話したところ、おそらくその絵は曾宮一念という洋画家が書かれた絵だと教えて下さった。早速曾宮一念という方を調べてみると「洋画家、随筆家、歌人」で黒田清輝の指導を受けた画家、一八九三年に東京で生まれ東京で生まれ百一歳まで生きられた方で、桜島には「桜塩渡航百回」

を自称するほどたびたび訪れて桜島を描いたと言われている。俳句結社誌の表紙絵というものが、いかに大事かということがわかる。

五十年の誌齢を積んだ「沖」も表紙絵については、登四郎はかなりこだわりを持っていた。創刊号の表紙絵は加藤利以地という方の絵で、浜辺に流れついた流木をペン画で描いたもので、創刊から三号まで、その絵が飾った。加藤利以地さんは確か、沖の創刊にアドバイスを頂いた村井和一さんのご紹介であったと思う。お茶の水の喫茶店の外観を描いた表紙絵などもあった。その後、版画絵の秋山巖さんの絵が表紙を飾ったこともあった。秋山巖さんは棟方志功に師事した人で種田山頭火の俳句などを題材にした木版画を描かれる方であった。その後、同人の上谷昌憲さんや野村東央留さんなどのデザイン画が表紙を飾ったこともあった。近年は熊谷博人さんに続き、池田蘭径さんに表紙絵をお願いしている。

能村 研三

飛火野の畦に白置く狐花  
かなかなの戸毎に触れて灯点く  
曳かれねば手持無沙汰の烏瓜  
「居りますか」「ぬるよ」と秋の簾越し  
ジーンパンを穿かせ案山子の若作り  
鳳仙花弾きて鬱を放ちけり  
狐花彦根に井伊の赤備

晩年の登四郎先生にへ刈田跡人さまよふに似たりけり」という句がある。縄文時代に始まったとされる稲作は、日本人の精神文化の形成に影響を与えたと言われるが、確かに豊年の稲穂を眺めながら止まっていると、自分の心身も充実して、しっかりと大地を踏みしめているように感じるものである。それ故、刈田となつてしまえば目の前の力強い景もなく、田んぼ自体が重量感を失つたようで心もとなない。言わば精神的防御を喪失した身には少しばかりの風も寂しく感ぜられよう。ふと流浪の心、流離の心が頭をもたげるのはこんな時ではなかるうか。

## 蒼茫集

人は命を

栗原 公子

かなかなや明日なすことを箇条書  
うす紙のやうな昼月大花野  
\*桃は種人は命を深く抱き  
色鳥や古地図の海の上に住み  
ガラス皿に雫の綺羅と黒葡萄  
珈琲のかをりの重き残暑かな

図書室

広渡 敬雄

夏萩やイターンてふ店なりし  
アイスクリーム歩荷が運び来しと言ふ  
\*図書室は木箱のごとし蟬しぐれ  
草刈りて二日寝かせし甘さかな  
テレワークデスクにけさの蛍草  
月白や裏返る蟬少し動く

残業帰り

福島茂

穴惑危ふき道と言はれても  
秋彼岸花屋に寄つて肉屋にも  
虫すだく空家となりし両隣  
石蹴つて一人遊ぶ子鳳仙花  
裏戸開け波音寄する良夜かな  
\*金曜の残業帰り桃を買ふ

和紙

大沢美智子

\*新涼やさはりて和紙のうらおもて  
流灯会闇濃き此岸歩みけり  
草市や発電機より灯火得て  
那須五岳ここに全し野菊かな  
少年は夜目にも皓齒根釣岩  
覗かせて貰ふ背負籠きのこ狩

ふるさとの水

内山花葉

\*ふるさとの水を称へて新豆腐  
諸洗ふ焼酎蔵の女達  
稲架組んで自給自足といふ自由  
林檎にも故郷ありけり便りせむ  
幽閉の姫の伝説色鳥来  
砂に坐せば流木めきて秋落暉

深くなる

林昭太郎

海鳴りを過ぎゆく夏の音と聴く  
湯上がりの爪やはらかし夜の秋  
厄日来る翅あるものに無きものに  
\*豊年や大河ゆつたり海に入る  
県境は何方も川いわし雲  
蝸や井戸幽くなる深くなる

# 潮鳴集

咆 哮 村上葉子

\* 炎昼を裂くトランペットの咆哮  
振り向きし少年眼玉まで日焼  
決心のつかず崩せりかき水  
子子のはてさて胡乱なる浮沈  
羊が一匹羊がゐない熱帯夜

鹽の町 森村江風

地下鉄で行ける故郷梨熟るる  
投げ釣りの届かぬ先の鰯雲  
源流の爽気離さぬ川の風  
空だけを映す田畑秋出水  
\* 高潮に克つが郷土史鹽の町

砂の眩く 小倉征子

波引くと砂の眩く星月夜  
鷹の山別れあかるき空一枚  
而して五感衰ふ白露かな  
\* 太陽の雫のやうに咲くカンナ  
人の死もやがて薄るる雁渡し

書に耽り 兵藤 恵

秋の初風犬の子は名を貰ひ  
とんぼうのばらばらとふゆるかな  
しなやかな愛のかたちへ秋茜  
\* 鍵穴めく古墳の眠り星流る  
芋虫の太りゆく夜は書に耽り

心 柱 広海あぐり

月清し塔に確かな心柱  
\* 満月の川の差し潮野生めく  
夏の津軽みな様々に太宰あり  
置き傘は遠き日のまま男梅雨  
秋天へ八ヶ岳の岩肌削ぎ増さる

往き交ふ 七田文字

潮入りの渦匂ひくる残暑かな  
火蛾舞へり床踏み鳴らすフラメンコ  
浜の砂きゆきゆと鳴らして夏の果  
朝風にひとり遊びの芋の露  
\* 海と川いのち往き交ふ秋の水

草の市 井原美鳥

葛の花安房は女波のかよふ国  
\* 草の市雨ともいへぬ雨の中  
しうしうと霧巻く猪の割き場かな  
陰画めく一舟月の道よぎる  
遠聞きが佳し千草野の口笛は

繡 仏 平松うさぎ

\* 繡仏のぬばたまの髪秋に入る  
セコイアの青き実の鳴る厄日かな  
爽涼の湿原に身を低く獣  
鬼蜻蛉翅は鋼の冷え連れて  
風切りの青整へて鴨渡る

ポケット 菅原健一

泣くまいとする子に優し鰯雲  
秋夕焼東京都庁棒立ちに  
ポケットといふ秘密基地休暇つ  
\* さやけしや楷書のごとき佇まひ  
枯れ始む向日葵秘密持つたまま

記念樹 平城静代

蓮の実や記紀の記憶を飛ばしをり  
父と子の背相形鯨日和  
二百十日賞味期限といふ縛り  
\* 人の世に極りありけり天の川  
記念樹の影くるぐると休暇果つ

# 沖作品



## 能村研三選

雲の影運ぶ稲穂の波重し

市川

澤田 英紀

ビー玉の芯に灯りし夕焼かな

ころころと転がし転げ芋洗ふ  
虹の根に巨船静かに滑り入る  
鬼瓦ぎりと睨め付く大西日

金光 浩彰

新調の眼鏡の捉ふ秋の色

秋の夜は更くるにまかせコルトレン

毒茸婀娜めく夜の深さかな

\* つれづれに夕日へ凭る案山子かな

千葉

熊谷 成子

\* 白芙蓉完了形で日々を生く

関 妙子

\* 柔道の枝一瞬や稲の花

\* ひとり仕事増やして夫の瓢箪

向日葵のブーケ目映き五輪かな

秋暑し孔雀の羽に目の模様

ゆふがほの蕾に振れ風の浜

石灰洞の碧き水面や秋の風

露草や疑ひ知らぬ幼の目

秋蝶のまた戻り来る赤き花

葉柄の迷路巧みに蓮見舟

水谷 昭代

一寸の命の青し糸蜻蛉

鈴木 和江

食足りて家族で囲む冷さうめん

訪ふは稲の香取り巻く一軒家

土用の丑うなぎ供養で休業す

朝顔や海より青き青選る

稲の花米一升は四方六千粒

筑波嶺に一筋の雲夏終る

空海の錫丈鍔びし赤とんぼ

\* 送り火の煙絶ゆまで海眺む

里村 梨郵

南冥の星かうかうと終戦忌

\* 月下美人尽すひと夜のドラマかな

稲つるび走る水面の冥さかな

雨戸繰るおとの軽さや今朝の秋

雲朱く湧きし彼方を鳥渡る

生家なき郷となりけり赤とんぼ

白萩の気儘に足をとられけり

雲朱く湧きし彼方を鳥渡る

神輿蔵の鍔びし鉄錠カンナ燃ゆ

大気舞ふ微かな磁力秋燕

秋澄みて刷毛目の走る五寸皿

はまなすや島を斜めに滑走路

秋澄みて刷毛目の走る五寸皿

はまだ何か脱ぎたき思ひして裸

石川

坂下 成紘

人間にのみ赦さるる裸かな

\* キヤストみなかの世の映画夜の秋

久々の火の入るバイク秋涼し

海水浴去る時は皆海を見る

経営学学ぶ油手夜学更け

補聴器を外し独りに秋の声

知己の名をまたも忘るや心天

神奈川

山中 洋子

父の背の華のやうな児火花果つ

顎に手を髭を撫ぜれば秋の声

\* 黙祷は音叉のやうに原爆忌

千葉

久礼 隆志

神名備の木洩日踊る荒神輿

\* 流木は人の語りか秋の浜

飛石の風抜けやすき女郎花

逸品の茶碗の由来風炉手前

かなかなや懐ふかき杜の寂

燃え立ちて狂気ひそめし曼珠沙華

戦争の記憶内耳の蟬しぐれ

千葉

久礼 隆志

龍太も見む山盧の空のいわし雲

艶のよき林檎の重さ供へけり

耿然と朝爽籟の散歩道

帰り得ぬ兄の法事や小鳥来る

耿然と朝爽籟の散歩道

\* 火焰土器見るがにこぞる曼珠沙華

江森 悦子

夕星や家居暮しの夏終る

# 飛鷹選評



能村 研三

つれづれに夕日へ凭るる案山子かな 澤田 英紀

澤田さんは、二つのオンライン句会の幹事の仕事をやって下さっている故か、勉強の機会が増え俳句が徐々に上達してきたのがうれしい。十月に入ると日の入りは五時頃で、澄んだ空に赤みを増した美しい夕日が見られる。刈り取りが終わった田んぼには役目を終えた案山子が手持無沙汰のように夕日に照らされていた。つれづれは古文的な表現だが、することがなく退屈なことという意味でこの句の景に合う。

柔道の 技 一瞬や 稲の花 熊谷 成子

東京オリンピックでは、日本のお家芸というべき柔道の試合に多くの見せ場があった。柔道の技が決まる瞬間は、普段見慣れていない人にはよくわからないことが多い。稲の花は微細で咲く時期も短く、よく観察をしなければ気が付かないこともある。柔道の技も稲の花も瞬間を見過こしてしまふようなものだが、稲の花は米づくりに、柔道の技は勝負の世界で欠くことの出来ないものなのである。

稲の花 米一升は 四万六千粒 水谷 昭代

この句も「稲の花」を詠んだ句で、作者の水谷さんは、前作の熊谷さんと共に東葛支部に所属し、柏のカルチャー教室で勉強されている。稲の花は米の出来高に直結するもので、その開花は祈りをもって見守られる。「四万六千日」の行事の由来も一升斛の中に入る米が約四万六千粒であることから、一升と一生を掛けたものと言われている。

白芙蓉 完了形で 日々を生く 金光 浩彰

芙蓉が咲くころの季節は、午後五時頃が日の入りの時間である。朝に咲き夕方には萎んでしまう一日花で花の命は短命である。作者の金光さんは、その日の仕事はその日の内という完璧主義の方なのだろう。芙蓉の花でも白芙蓉は潔癖さを感じさせる花でもある。

ひとり仕事 増やして 夫の瓢箪 関 妙子

ほのかな夫婦愛を感じる句である。せつせと瓢箪の棚作りに励む夫、妻である作者は手伝いたくても中々手出しすることは出来ない。夫が労をいとわず励む姿に感謝しながら、その仕事を見守った。

送り火の煙 絶ゆまで 海眺む 鈴木 和江

送り火を焚いて、家に迎えた先祖の霊にお帰りいただく行事。昔は川や海のかなたにあの世があると考えられていた。送り火の最後の煙が見えなくなるまで、海を眺めて先祖の霊をお送りました。